

2019年8月11日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「全地に散らされた」

聖書：創世記11：1～9

バベルの塔建設は、《同じ言葉を使って、同じように話していた》人たちが、《石の代わりにレンガを、しっくい代わりにアスファルト》という新しい技術を得て、高い塔を築いてくという古代の技術革命がそこに記されている。この高い塔を築いて行くのは、いつの時代も競って高い塔を築く。目的は《有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう》ということ。人間が散らされず一つになることは、何か良いことのようにも思えるが、しかしそれは、神の御名が崇められる事よりも、自分たちの名が高められること、人間の技術、人間の力により、神の領域に達することを目指したということになる。神など必要としない、神無き人間社会を築いて行くというものであった。人間がより高く、上へ上へと上ろうとする時、低く居られる神の声は、聞こえにくいのかもしれない。

このバベルの塔物語の最後に《主がそこから彼らを全地に散らされた》とあるが、この物語は神の裁きによって終わっているのか？ この《散らされた》は、神の怒りがそこにあるように思いがちだが、実はこの言葉は《カナン人の諸氏族が広がった》(10：18)、《広がった》と同じ原語が使われている。ここは、ノアの箱舟物語が記されているところで、ノアの子孫が末広がっていくということが記されている。バベルの塔の物語が《散らされた》ことで終わっているのは、人は上を目指し、より高くではなく、一つの民、一つの言語、皆が同じでなければならないと、神が望んでいるのではなく、人は横に広がっていくこと、横との繋がりを目指すこと、いくつもの民、いくつもの言語、いくつもの違いを越えて、認め合うこと、理解していくことが、神が望んでおられるということ。このバベルの塔の物語から教えられることかと思う。

ノアの箱舟は、神の言葉に聞き従う中で、山の上で舟を造る。時に周りから理解されず、人々から笑われることもきつとありながらも、神の言葉に忠実に従い、舟を造り、箱舟に乗り込んでいく。また、神の「箱舟から出なさい」という言葉で、横に広がって行く。ノアの忠実な在り方とは、相反する不信仰な形がバベルの塔の物語だが、人間が神の声を聴かず、人間の欲のままにより高く、上へ上へと這い上がろうとする時、低く居られたもう神は、人を今一度、下へと降ろし、全地に散らされる方である。神は忠実なノアの家族へ、バベルの塔建設者の人々へ等しく導いておられる。(神谷)